
石川県立美術館だより

平成14年4月1日発行 第222号



飴釉加賀光悦写茶碗 初代大樋長左衛門

目次

春の優品選（前田育徳会展示室）.....2	企画展示室、各地の展覧会.....5
春の優品選（第2展示室）.....2	平成13年度 新収蔵品一覧.....6
常設展示室 主な展示作品、図書閲覧室NOW...3	企画展TOPIC、四月の行事案内 他.....7
美術館小史・余話（21）.....4	所蔵品紹介、友の会からのお知らせ 他...8
展覧会回顧（平成十三年度、高光一也展）...4、5	

ホームページアドレス <http://www.ishibi.pref.ishikawa.jp/>

常設展示室(前田育徳会展示室)

特集

NHK大河ドラマ「利家とまつ」放映協賛

春の優品選

4月1日(月)~5月19日(日)

今回の特集は、加賀藩主前田家が収集育成した美術工芸品の中から、春を主題とした作品を中心に取り合わせました。季節はまさに春たけなわです。日本人は四季の変化を愛で、春の息吹を敏感に感じ取り、その美を生活のなかに取り入れ、さらにはそこに人の生き様を投影してきました。そのような伝統が今展示する作品にも反映されているといえましょう。それでは三点の作品を紹介いたします。

黒塗布目引出絵替絵具の筒 伝一代五十嵐道甫作
この筒は、総体黒漆塗りで金象嵌が施された隅金具が打たれています。片開きの扉を開けると、中に十四の引出が納められ、その引出に様々な蒔絵意匠が描かれています。梅・八重葎・菊・楓に流水の扇面散らし・菊に桔梗・宝尽し・鉄線・柳に蝉・羊歯・萩・竹など様々な四季の自然が、五十嵐蒔絵の意匠に見事に凝縮されています。五代藩主前田綱紀の時代に活躍した二代五十嵐道甫の作と伝えられています。

越中愛本橋図 佐々木泉玄筆
この橋は五代藩主前田綱紀により架けられた橋です。黒部川は難所といわれ、氾濫をくり返し、村人や旅人が困っていることを知り、橋の建設を命じたので、この難事業を進めた綱紀の善政を讃えるため、後世、加賀藩の御抱絵師であった佐々木泉玄(一八〇四~七九)に描かせたものです。黒部川上流の春の景が、泉玄の特色をよく表した穏やかな色彩で描かれています。

蒔絵広蓋
広蓋は、元来衣服を納めた箱の蓋で、その蓋を衣裳盆として用い、箱は次第にすたれて蓋が独立したものです。この広蓋は大・中・小の三枚一組で、見込に吉祥文様の熨斗水引文、華麗で優雅な雰囲気をもつ春の景のなかにも求めた桜樹幔幕文や花車文がおおらかに表現されています。泰平の世を謳歌するかのような大名調度にふさわしい趣を呈しています。

今特集では、館藏品の中から、江戸時代の絵画・工芸品を紹介しますが、今回は「大樋焼」「尾形乾山」「加賀藩の鐙」を小テーマとして設け、展観します。

大樋焼は、寛文六年(一六六六)、加賀藩五代藩主綱紀が、千宗室を京都より招いた時、茶碗師として招かれた土師長左衛門(一六三〇~一七二二)が、大樋村(現金沢市大樋町)に窯を築いたことに始まると伝えられています。後に、その地名より姓を大樋に改め、大樋焼は、独特の黒味を帯びた餗釉が特徴となっています。今回は、「餗釉赤茶碗」、「餗釉加賀光悦写茶碗」、「餗釉蟹五角香合」、「餗釉獅子香炉」(以上、初代大樋長左衛門)、「赤染茶碗」(五代・六代大樋長左衛門)を紹介いたします。

尾形乾山(一六六三~一七四三)は、光琳の弟。乾山とは、もともと京都鳴滝の窯名でしたが、後に号として使用するようになります。野々村仁清に作陶を学びますが、血縁にあたる本阿弥光悦の影響は大きく、琳派意匠の特徴を持つ作品を多く制作しました。ここでは、「染付錆絵杜若図茶碗」、「黒釉蒲公英図茶碗」、「錆絵雪笹図鉢」、「色絵草花図絵替長皿」を紹介いたします。

鐙とは、馬に乗る際、鞍の両側より吊るして足の裏を支える道具です。江戸時代、鐙は主に加賀・尾張・京都で造られていましたが、伝存するもの多くは、加賀でつくられた鐙です。將軍家に献上されたり、各藩藩主に贈られたりしました。この時代の鐙は、機能性よりも装飾性が重視され、象嵌(元になる金属に別の金属を嵌め込む)技法により、文様が表されます。複数の鐙に同じ文様が施されることはなく、正面にあたる鳩胸・笑の部分と、舌裏の文様が見頃となっています。ここでは、館藏品の中から、加賀象嵌師の作による鐙六点を紹介します。

今特集では、これらに、「蒔絵草花丸文花見弁当」、「富貴樹上双鳥図」、「木地高彫鳳凰文鞍」、「木彫竜図鞍」、「四季草花図屏風」をあわせて計二十点を展示します。

常設展示室(第2展示室)

特集

NHK大河ドラマ「利家とまつ」放映協賛

春の優品選

4月1日(月)~5月19日(日)



黒釉蒲公英図茶碗 尾形乾山

常設展示室

主な展示作品

4月1日(月)~21日(日)

●=国宝 ○=重要文化財 □=重要美術品
 =石川県指定文化財



●色絵雉香炉(右)
 ○色絵雉香炉(左)
 野々村仁清

前田育徳会展示室

特集 春の優品選

- 黒塗布目引出絵替絵具筆筒
 - 越中愛本橋図
 - 春景山水図
 - 桜樹幔幕文時絵広蓋
 - 青磁八葉蓮華鉢
 - 蒔絵三十六歌仙花卉文堤重
 - 梨子地桐文時絵海無鞍
 - 牡丹唐草柳に燕象嵌鏡
- 伝一代五十嵐道甫
 佐々木泉玄
 橋本雅邦
 伝与四郎

第1展示室

●色絵雉香炉

色絵雉香炉

野々村仁清
 野々村仁清

第2展示室(古美術)

古九谷

- 色絵布袋図平鉢
 - 色絵百花散双鳥図平鉢
 - 青手牡丹図平鉢
 - 特集 春の優品選
 - 飴釉蟹五角香合
 - 飴釉加賀光悦写茶碗
 - 黒釉蒲公英図茶碗
 - 染付錆絵杜若図茶碗
 - 銀象嵌花筏文鏡
 - 銀象嵌丸紋に紗綾形繫鏡
 - 銀象嵌籠目紋鏡
 - 銀象嵌丁字散文鏡
- 初代大樋長左衛門
 初代大樋長左衛門
 尾形乾山
 尾形乾山
 小市永次
 小市永次
 勝木氏賢
 勝木氏賢
 吉平
 吉平
 氏政
 氏政

第3~6展示室は、四月二十一日(日)まで第58回現代美術展会場となっています。

観覧料

一般 350円	個人	一般 280円	団体(20名以上)
大学生 280円		大学生 220円	
高校生以下は 無料	高校生以下は 無料		
高校生以下は 無料	高校生以下は 無料		



飴釉蟹五角香合 初代大樋長左衛門



銀象嵌籠目紋鏡 吉平



色絵布袋図平鉢 古九谷

図書閲覧室NOW

新着図書紹介

今回は、平成十三年に、鹿児島県歴史資料センター黎明館と沖縄県立博物館で開催された「かざりとかたち」展の図録をご紹介します。

回展は、平成十三年の春に、新たに独立行政法人としてスタートした国立博物館・国立近代美術館のうち、京都国立博物館と京都国立近代美術館の所蔵品を中心に、開催館の所蔵品も含めて開催されました。その内容は、わが国の弥生時代から昭和時代に至るまで、生活の中で育まれてきた日本人の美的感性を、特色ある工芸や絵画を通してみようとするもので、特にそれらのかざりやかたちの楽しさ、美しさに焦点を当てています。構成は大きく、「かざりの美」「かざりのかたち」「南海のかたち」に分けられ、皿・鉢・茶碗・壺などの陶磁器、箱・文台・櫛・印籠などの漆器、鏡・鐔・簪などの金工品、着物や刀剣・甲冑、宗教法具から日本画や洋画などの絵画にいたる、国宝・重要文化財を含む、約百六十点が出品されています。

ちなみに、国立の博物館・美術館の所蔵品を、テーマをもうけて構成し、巡回するという企画は、平成六年度から行われてきており、当館でも平成七年、「日本の美」と題して開催しました。こうした展覧会では、東京や京都へ行かないと、なかなか接する機会が少ない国立博物館・美術館所蔵の名品を、身近に鑑賞することができるとともに、地域における文化財に対する啓蒙普及や美術活動の推進という面でも、有益な試みであるといえましょう。

*開室時間は午前九時三十分~午後四時三十分。貸出し、コピーサービスは行っておりません。


 展覧会回顧

平成十三年度開催の展覧会(二)

後期に一階企画展示室で開催された当館主催の特別展は、二回です。九月から十月にかけて開催した「花と緑の名品展」は、第十八回全国都市緑化いしかわフェアに協賛して開催した展覧会でした。サブタイトルの『自然との対話』は、日本人の美意識を表すものとして、海外で開催した当館の所蔵品展でも使用したもので、日本美術の特徴の一つといえます。古美術から現代まで、絵画と工芸の各分野から、自然の中でも花と緑をテーマにした作品100余点を展示しました。日本画・油彩画・陶磁・漆工・染織等の異なる材質・表現技法、額装・屏風・壺・皿・箱・棚・着物・能装束等様々な形態の作品は、一点一点が各時代、各作家の代表作を選びすぐった作品であり、自然との対話の中から、美意識を高め、美術作品としてきた日本美術の特徴を表す作品群であり、鑑賞者を魅了しました。一月に開催した「没後15年 高光一也展」は、昭和六十一年に亡くなった高光一也氏の没後十五年にあたり開催したものです。今回は、氏の長い画業を各時代を代表する油彩・素描七十点で辿るとともに、氏のアフリカ彫刻のコレクションと写真、遺愛品で構成しました。アフリカ彫刻は、昭和二十九年にパリで出会い、ジャコメッティの細長い彫刻や、ピカソのゲルニカを連想させる造形美と抽象美に魅せられたということ



「高光一也展」会場

です。この時期には、アフリカ彫刻に結びつく作品を制作していません。また、自身が撮影した写真は、

作者が何に心引かれ、感じ、シャッターを押したのか、写真に添えられた作者の言葉とともに、画家の内面を探る上で興味深いものでした。

二階常設展示室で開催した特別陳列や特集は三十回を数えました。

「前田家 名物裂の精華」は、例年のテーマですが、今回は、台紙貼のものに、反物としての形状を留め、船載された当時は彷彿とさせる「覆盆子錦」、「萌黄地一重蔓花唐草尽し縫絹」の二点も加え展示し、女性ファンを中心に話題となりました。

「作庭記の世界」は、第十八回全国都市緑化いしかわフェアに協賛して開催したもので、現存する最古の書写本で前田家伝来の重要文化財「作庭記」の上下二巻を全巻公開しました。

「坂寛一・坂坦道 油絵と彫刻」は、能登内浦町出身の彫刻家坂坦道と父であり洋画家の寛一の父子展でした。北海道へ渡った後も望郷の念を感じさせる彫刻も制作した坦道の作品展示を聞き、地元からの入館者もみられました。

「石川の人形」は、遺族から十一点の寄附を頂いた日展の人形作家・齋藤悦子の作品お披露目を兼ね、齋藤の作品に、石川県の人形作家の中から下口宗美・紺谷力・井口十糸・室田芳子の四人の作品を加えて、美術工芸品としての多彩な展開を見せる人形の世界を紹介し、女性ファンに喜ばれました。

一月に開催しました「利家と末森の合戦」は、NHK大河ドラマ放映に協賛して開催したもので、前田家にとっては浮沈をかけた合戦として位置づけられる天正十二年九月(一五八四)の末森合戦について、「末森合戦絵巻」、「末森城模型」、「利家末森城之救援図」等で紹介した展示で、鑑賞者からは、九月十四日から開催される「利家とまつ 加賀百万石物語展」前田家と加賀文化」に期待が寄せられました。(南俊英 学芸第一課長)

美術館小史・余話

21

 嶋崎 丞すま 当館館長

美術館の広報紙も発行することができ、愛好会会員も千名を越えた昭和四十三年度末、教育委員会社会教育課(現生涯学習課)から突然連絡が入った。文部省社会教育局(現文部科学省生涯学習政策局)が、地方で婦人を対象とした社会教育実践の場所を探しているというのである。講師等の多少の予算は付いているようなので、美術館で引き受けてくれないか、という内容だった。全国では只一ヶ所の開催、それも地方では初めだということなので、実施を引き受けることにした。

実施するとはいうものの、美術館としても初めての教育普及事業であり、ある意味では、日本で今後行われていくであろう社会教育活動の、モデルにもなるということである。私共美術館職員に多少の緊張が走った。しかも文部省から届いた実施要項を見ると、延べ二十四回の学習プログラムを組まなければならないことになっている。これは大変なことを引き受けたと思った。前年第一回の開催場所は東京国立博物館だったので、早速プログラムを取り寄せて見てみると、博物館のそうそうたる面々が名前を連ねており、まさにお国だから出来た講座だったのである。

しかし、何はともあれ、引き受けた以上はこうしたこととはあまり気にせず、石川県らしいやり方で実施しようということではままとまった。ただ、当時の美術館学芸担当職員はわずかに三名。しかも一人は展示企画に専念している。結局私が企画から外部講師の交渉まで、すべて担当することとなる。その頃は加賀友禅の木村雨山さんなど、大物工芸家さんが健在であり、金沢美術工芸大学の教授の方々も動員すれば、東京国立博物館にも負けない内容になるはずである。まずそんな見通しをつけた。

美術を学ぶ婦人学級(一)

没後15年 高光一也展

当館はこれまで二度高光先生の大きな展覧会を開催してきました。うち二回は代表作展、一回は館藏品展です。そこで四度目の今回は、作品とともに、それを描いた画家そのものを前面に出してはどうか、つまり作者を知ることによって作品が見えてくることがあるのではないかと、少し路線を変えてみました。

むろん作品そのものが作者なのですから、代表作をずらつと並べて、その絵から作者の言葉を聞けばそれで充分かとも思いますが、もう少し、作者を知ることのできるもの、つまり遺愛の品とか、使つてらつた筆やパレットといった道具とか、あるいは趣味で収集されたものとか、そういう具体的な品々を展示して、より親しみの持てる展覧会としたい。こういう思いを今回の高光展に込めたのでした。

そこで三つある企画展示室の二つに代表作をほぼ網羅し、最後の一室、第9展示室で遺愛の品やコレクションにより、高光先生の創作の源泉にあるものについて思いをめぐらしていただくという構成にいたしました。

この第9展の中の白眉は何といつてもアフリカ彫刻のコレクションであったかと思えます。今回、作品はもちろんのこと、アフリカ彫刻に魅せられたという方も多かったのではないのでしょうか。百点を超えるコレクションの中から四十点をご覧いただいたわけですが、先生のその惚れ込みようにはただならぬものがあります。そしてただ惚れたというだけでなく、昭和三十年代の人体を



「高光一也展」会場

幾何学的に描いていた、高光先生の、造形の冒険時代、とても呼ぶべき時代の作品群は、いかにアフリカ彫刻の影響が大であったかを物語っています。西洋の画技を学びつつも日本人である自分の立脚点はどこにあるのか、そう考えていったとき、アフリカ大陸の造形に、一つの答えを見出されたのではないのでしょうか。

その後の先生のたどり着いた表現様式とテーマ、つまり、白を基調としつつとしてマッドな岩絵具を思わせる絵肌と美人画の系譜に連なる女性像は、日本の油絵とは何かを考え抜かれて、到達された世界だと思えます。そして今回の展覧会で改めて知らされたことが一つありました。それは、先生が僧侶であったのだということです。高光一也は画家であると思いがち、この観点からのみ先生の絵をこれまで観てきたのですが、どうもそれだけではだめなのではないかという思いがいたしました。

先生が法話をされている写真や仏頭を第8展示室に展示し、また、会期中に行われたご子息一先生の講演会では、高光先生の法話を録音テープでお聞きいただきました。これを聞かれた人は驚かれたのではないのでしょうか。金沢弁丸出しのざつとくばらんな口調で、尻上がり熱が入っていきまふ。まるで漫談でも聞いているようで、それでいて深く考えさせられました。つくづく、画家としての姿は先生の半面にすぎなかったのだと思ひ知らされたのでした。高光芸術がひたすら明るく健康的であることはこの法話に聞こえる先生の全く屈託のない笑い声と直結していると感じるのです。

高光先生を知るよすがとなる品々を作品と共に並べ、より深く、作品をご覧いただく、こつした意図は、ある程度達せられたのではないか、そう今回の展覧会を考えているのですが、はたしてどうだったのでしょうか。

(二木伸一郎 学芸主査)

企画展示室

第58回現代美術展

四月六日(土)～二十一日(日)
(第3～9展示室)

部門 日本画 洋画 彫刻 工芸 書 写真
入場料

一般八〇〇円 大高生六〇〇円 中小生五〇〇円

団体料金は各二〇〇円引

当館友の会会員は、会員登録提示により団体料金

連絡先 金沢市香林坊一五 一 北國新聞社事務局

☎〇七六 二六〇 三五八一

国立カイロ博物館所蔵 古代エジプト文明展

四月二十八日(日)～五月十九日(日)
(第7・8・9展示室)

本展は、国立カイロ博物館の至宝「ブスセンネ」世の黄金のマスクをはじめ、日本初公開の名品を含む七十五点の作品により、古代エジプトの栄光を紹介するものです。

入場料

一般一三〇〇円(一〇〇〇円)

中高生一〇〇〇円(八〇〇円)

小学生 八〇〇円(六〇〇円)

()内は二〇名以上の団体料金

当館友の会会員は、会員登録提示により団体料金

連絡先 金沢市香林坊一五 一 北國新聞社事務局

☎〇七六 二六〇 三五八一

各地の展覧会

四月

開催日程 休館日 内容等は直接各館へお問い合わせ下さい。

イタリア・ファエンツァ 国際陶芸博物館所蔵

マジヨリカ名陶展 4/4～6/23

東京都庭園美術館(東京都港区・〇三三四四三〇一〇一)

生誕100年記念 小松均展 4/5～5/6

富山県水壘美術館(富山市・〇七六四三三三七一九)

日本画への招待 一人・花・風景 4/12～5/26

京都国立代美術館(京都市左京区・〇七五七六一四一一)

大仏開眼1250年 東大寺のすべて 4/20～7/7

奈良国立博物館(奈良市・〇七四一一二二七七七一)

平成13年度 新収蔵品一覽

平成十三年度の新収蔵品は、寄贈四十七点、購入十一点、計五十七点となりました。ご寄贈を賜りました各位に対し、改めて感謝の意を表します。また今後とも皆様のより一層のご協力をお願いいたします。
平成十四年三月三十一日現在の収蔵品総数は二千六百九十一点です。

- | | | | |
|-------|--------------|-----------------|----------|
| 陶磁 | 色繪草花文呉州赤絵写 | 春日山窯 | 相川照子氏寄附 |
| | 釉裏金彩大山蓮花文鉢 | 吉田美統作 | 吉田美統氏寄附 |
| | 赤網手大皿 | 福島武山作 | |
| | 竹図鉢 | 南繁正作 | |
| | 色繪六稜壺 | 佐藤亮作 | |
| 漆工 | 蒔繪菊慈童図薬籠箱 | 伝五十嵐道甫作 | |
| 染色 | 友禅訪問着「夕風」 | 坂井教人作 | 坂井教人氏寄附 |
| | 友禅訪問着「藤花陰翳」 | 二代由水十久作 | |
| | 友禅訪問着「桐文」 | 田丸幸子作 | |
| 金工 | 象嵌龍銀花器「岑寂樹林」 | 中川衛作 | |
| 刀剣 | 大身槍 | 日本号写 附螺鈿拵 隅谷正峯作 | 桂木ふさ子氏寄附 |
| 人形・截金 | いずみ | 斎藤悦子作 | 渡辺奈美氏寄附 |
| | あじさい | 斎藤悦子作 | 渡辺奈美氏寄附 |
| | 月の光に | 斎藤悦子作 | 渡辺奈美氏寄附 |
| | 日の光に | 斎藤悦子作 | 渡辺奈美氏寄附 |
| | 祈り | 斎藤悦子作 | 渡辺奈美氏寄附 |
| | うめ | 斎藤悦子作 | 渡辺奈美氏寄附 |
| | ふかみ草 | 斎藤悦子作 | 渡辺奈美氏寄附 |
| | COROLLA | 斎藤悦子作 | 渡辺奈美氏寄附 |
| | 香氣波 | 斎藤悦子作 | 渡辺奈美氏寄附 |
| | ラ・メール | 斎藤悦子作 | 渡辺奈美氏寄附 |
| | 截金彩色合子「西」 | 西出大三作 | 渡辺奈美氏寄附 |
| 日本画 | 草花図 | 坂寛一筆 | 坂知恵子氏寄附 |

- | | | | |
|----|------------------|--------|----------|
| 太夫 | 油彩画 | 坂根克介筆 | |
| | ふたり | 前田さなみ筆 | 前田さなみ氏寄附 |
| | 休日の肖像 | 前田さなみ筆 | 前田さなみ氏寄附 |
| | 街角に秋 | 前田さなみ筆 | 前田さなみ氏寄附 |
| | 見透せぬ窓 | 前田さなみ筆 | 前田さなみ氏寄附 |
| | 見透せぬ窓 | 前田さなみ筆 | 前田さなみ氏寄附 |
| | 見透せぬ窓 | 前田さなみ筆 | 前田さなみ氏寄附 |
| | 風景 | 藤井外喜雄筆 | 藤井キヨミ氏寄附 |
| | 静物 | 藤井外喜雄筆 | 藤井キヨミ氏寄附 |
| | 出を待つ | 鴨居玲筆 | 富山栄美子氏寄附 |
| | 裸婦 | 鴨居玲筆 | 富山栄美子氏寄附 |
| | 尾小屋鉾山 | 坂寛一筆 | 坂知恵子氏寄附 |
| | 土塀 | 坂寛一筆 | 坂知恵子氏寄附 |
| | 画室の裸婦 | 坂寛一筆 | 坂知恵子氏寄附 |
| | 裸婦 | 坂寛一筆 | 坂知恵子氏寄附 |
| | 肖像(自画像) | 坂寛一筆 | 坂知恵子氏寄附 |
| | ピアノの廃墟 | 葛健三筆 | 葛健三氏寄附 |
| | 過ぎ去りしアームストロングの肖像 | 葛健三筆 | 葛健三氏寄附 |
| | ティチーノ寸景(スイス) | 田辺栄次郎筆 | 田辺多鶴子氏寄附 |
| | 傀儡師 | 吉田富士夫筆 | 吉田芳子氏寄附 |
| | 逢う魔が刻の笛の音 | 吉田富士夫筆 | 吉田芳子氏寄附 |
| | 交霊術・エマロ | 吉田富士夫筆 | 吉田芳子氏寄附 |
| | 青空と水門 | 新保甚平筆 | |
| | 彫塑 | | |
| | 焦土を行く | 坂坦道作 | 坂知恵子氏寄附 |
| | 青年像 | 坂坦道作 | 坂知恵子氏寄附 |
| | 縛 | 坂坦道作 | 坂知恵子氏寄附 |
| | 話 | 坂坦道作 | 坂知恵子氏寄附 |
| | チンドン屋 | 坂坦道作 | 坂知恵子氏寄附 |
| | かえり舟 | 坂坦道作 | 坂知恵子氏寄附 |
| | 御陣乗太鼓 | 坂坦道作 | 坂知恵子氏寄附 |
| | 赤とんぼ | 坂坦道作 | 坂知恵子氏寄附 |
| | 思惟 | 坂坦道作 | 坂知恵子氏寄附 |
| | Misere | 中村晋也作 | 中村晋也氏寄附 |
| | 風 | 得能節朗作 | 得能節朗氏寄附 |





大樋黒釉茶碗B (左) 大樋黒釉茶碗B (右)
平成13年 式年遷宮記念神宮美術館蔵

企画展TOPIC

大樋長左衛門の作陶世界 その二

本展覧会では、作者の旺盛な制作力を如実に示すものとして、陶芸作品以外にも、達意あふれる画技を示した掛軸類、軽妙かつ飄逸さにみちたデザインによる漆芸の棗や盆、そして椅子も展示いたします。

その椅子の五脚出品予定のうち、三脚は前回のこのコーナーで紹介いたしました江戸後期の画僧仙厓の有名な墨画「」によるもので、陶芸作品にも試みている意匠であり、作者の関心の深さが偲べれます。

こうした古典を規範としながら、現代の感性を新たに付加することで、創造性豊かな世界を現出することは、優れた創作者の常とも言えます。すなわち、大樋氏にあつてはその規範とする古典とは、茶陶であり、さらには茶道の統合された美の世界であることは明白です。

例えば、茶碗類に目を向ければ、大樋焼独自の飴釉や黒釉は言つまでもなく、白釉・三彩・三島手・千点文・油滴天目・木葉天目・安南・唐津など、用いられている技法の多彩さには驚くばかりです。それは、日本人が愛玩したきた東洋陶

磁全般に対しての、幅広い知見の反映であるとともに、筒茶盃・平茶盃など形体や大きさ、そして意匠の多様性こそは、茶事にも精通した作者ならではの作陶世界を如実に示すものとなっています。

さて、大樋氏は作家として創作活動にいそむばかりでなく、後進の育成にも早くから積極的に取り組んでいます。すなわち、昭和四十四年から五十二年までは金沢美術工芸大学の助教授に、また平成元年に金沢卯辰山工芸工房が開設されるとともにその工房長に、また十二年になって金沢学院大学美術文化学部の学部長にそれぞれ就任しています。

以上、これまで三回にわたって大樋長左衛門氏の作陶世界の一端をご紹介しましたが、無論これだけではとても十分とは言えません。是非とも、展示室で実際の作品を見ていただくことで、その旺盛な創作世界を堪能していただくことを願っております。

なお、五月十二日(日)には、「私の作陶人生」という演題で、大樋氏による講演会が、当館ホールで午後一時半から開催されます。聴講無料ですので、お誘い合わせうえご参集いただければ幸いです。

(寺尾健一 学芸専門員)

四月の行事案内

《入場無料・いずれも午後一時三十分から行います》

月日	行事	内容	会場
4/7(日)	CDコンサート	バッハのカウンター J.S.バッハ カンタータ第24番「まじりけなき心」 第25番「汝の怒りによって」(約35分)	ホール
4/14(日)	月例映画会	前田青邨と日本画の流れ(29分)	ホール
4/21(日)	月例映画会	工芸 作家とその世界 「大樋年朗・北出不二雄・慶塚修兵衛・村木文三郎・角健三郎」(21分)	ホール
4/27(土)	土曜講座	大樋陶芸の魅力	講義室
4/28(日)	月例映画会	古代エジプト・遙かな原風景 ピラミッド空間の出現(23分)	ホール

今月の全館休館日は四月二十二日(月)～二十四日(水)です。

今後の展覧会

日本芸術院会員 大樋長左衛門の世界

(第5・6展示室)
四月二十五日(木)～五月十九日(日)

現代を代表する陶芸家大樋氏の、初期から最近の作品までを一堂に会し、そのたゆまない努力と創造の足跡と、その到達した新しい表現世界をあわせてご紹介いたします。

利家とまつ 加賀百万石物語展

～前田家と百万石文化～
(第7・8・9展示室)
九月十四日(土)～十月二十七日(日)

本展はNHK大河ドラマ「利家とまつ 加賀百万石物語」にちなんで開催するものです。
卓抜な時代感覚と器量で、秀吉に次ぐ立場を築いた利家の人となりを、時代背景と共に紹介します。そして、利家から三代利常が育んだ古九谷や加賀時絵、壮麗な屏風絵など、百万石の城下に花開いた加賀文化の精華をあわせてご紹介いたします。



銀象嵌丁字散文鏡

氏政 生没年不詳

銘加州金沢住氏政作

江戸 18世紀

幅13.0 奥行26.5 高さ25.3 (cm)

加賀象嵌も、加賀時絵と同じく、加賀藩二代藩主前田利常が、京都や江戸から名工を招き細工所を設けたところから始まります。

利常は、室町時代以来、装剣小道具の名家として名高い後藤家の頭乗（下後藤家）や寛乗（上後藤家）を召し抱え、一年交代で細工所に招き制作と職人の指導にあたらせていました。このことから、加賀象嵌の基礎ができ、以後加賀藩は日本を代表する象嵌の生産地となり、その伝統は今日まで伝えられています。

なかでも加賀象嵌を代表するものは鏡であり、藩主から幕府への献上品として、あるいは大名諸侯への贈答品として送られ、鉄地に銀平象嵌のはずれにくい特徴やデザインの素晴らしさからその名は全国に知られたることとなりました。

この鏡は、鳩胸から笑にかけて、香料や油を採る樹木である丁字の実を図案化して散らしているが、鉄と銀の織りなす輝きは豪華で、武器としての用と美を兼ね備えた逸品です。

底にあたる舌裏には、葡萄文が同じく銀象嵌され、踏み込みには朱漆を塗り、紋板には正方形を横に二つ縦に三つ並べた透かしを施した母衣穴を設け、正面に「加州金沢住氏政作」の銀象嵌銘が入っています。

「氏政」については、勝木系と金子系に氏政を名乗る象嵌師は何人かいますが、今のところ特定はされていません。

斬新なデザインと、同じものが二点と無い一品製作は、古九谷と共通するものがあり、加賀文化を代表する工芸品といえます。

友の会からのお知らせ

9 2 0 - 0 9 6 3
金沢市出羽町 2-1

石川 県 美 様 2002

郵便番号バーコード

会員番号
会員証裏面左上の番号と同じ
ものです。

このたびは友の会へご入会下さいましてありがとうございます。会員の皆様のお手許にはこの『美術館だより』を毎月お送りいたしますが、送付封筒表宛先ラベルは上記のようになっております。記載事項に誤りまたは今後変更などがございましたら、お手数でも一報下さいませようお願いします。また会員証提示による入館料割引は、石川県立歴史博物館、石川県七尾美術館、石川県輪島漆芸美術館でも受けることができます。いずれも各館主催展覧会に限りますが、お出かけの際にはどうぞご利用下さい。

「日本芸術院会員 大樋長左衛門の世界」関連行事

講演会 聴講無料

演題 私自作陶人生

講師 大樋長左衛門氏

日時 五月十二日(日)午後一時三十分

会場 当館ホール

休館日 四月二十二日(月)～二十四日(水)

石川県立美術館だより

第一二二二号 平成十四年四月一日発行

〒九一〇 〇九六三 金沢市出羽町二番一号

TEL 〇七六(一三)七五八〇

FAX 〇七六(二二)九五五〇